

翰香残し、文豪伉儷はいずこ

新発見資料：『台所太平記』を巡る谷崎潤一郎・松子の書簡

陳 齡

軽妙洒脱な筆致で描かれた「台所太平記」は作者である谷崎潤一郎が没後五十周年を記念して一昨年に明治座の舞台で演じられたのが記憶に新しい。これは昭和三十七年十月から翌年三月にかけて、サンデー毎日に連載され、後中央公論社によって出版された単行本を底本に脚本化されたもので、昭和四十三年に藝術座の演目となって以来の再度の舞台演出であった。「昭和変動期に小説家宅で繰り広げられたお手伝いさんたちの日常生活を明るく楽しく描いた“お手伝いさん奮闘記”」と銘打った通り、谷崎はこの自らの最晩年作では昭和十一年頃から戦後にかけて、自宅に仕えていた鹿児島県出身の女性をはじめ、各地から集まった多姿多彩な女中¹の悲喜哀歓を面白おかしく織りなしている。沢口靖子、南野陽子、古谷一行らの豪華キャストによる一昨年の舞台もまた大きな反響を呼んだ。こうした中で、筆者は作中人物のモデルとなった実在の人達や創作前後の事情をうかがうことができる作者谷崎と松子夫人の書簡が鹿児島県坊津町の個人宅で保管されていることを知った。所有者の許可を得て、今回その谷崎の書簡五点と松子夫人の書簡五点計十点の全容を公開すると共に、作品成立の裏事情や作品の背後に潜む人間模様の一端を明らかにしたい。

まず、昭和三十七年十一月から翌三十八年五月までの間に書かれた谷崎の書簡五通を順列してみよう（図版1 - 16も合わせて参照されたい）。

(一) 谷崎潤一郎書簡

①昭和三十七年十一月二十三日

十一月八日付のお手紙及びかつを節有
難く存じます そのうちポンカンもお
送り下さる由楽しみにしてゐます
私も坊津町は行ったことはありませんが
何か自分の故郷のやうな気がしてなつかしく
感じてゐます 今も泊生れの人が近所
に残ってゐますので時々御地の噂などを
話合つてゐます たゞ近頃は泊の人を
招きましてもさっぱりお手傳ひさんに
来てくれないので残念に思つてゐます ど
うか來年春にでもなりましたら御地の娘
さんの中からお手傳ひさんの希望者を搜
して戴きたいと存じます 私は泊生
れの人が大好きなのです
先はお礼かたへ〜お願ひまで

十一月 二十三日

谷崎潤一郎

長井正雄様
尾辻岩雄様

封書(表) 鹿児島縣川邊郡坊津町役場内
長井正雄様
尾辻岩雄様

(速達)

(裏) 十一月二十三日
熱海市伊豆山鳴澤
電話熱海二九七〇
谷崎潤一郎



図版 1



図版 2



図版 3



図版 4

②昭和三十八年二月二十日

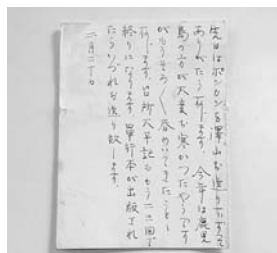
先日はポンカンを澤山お送り下さつて
ありがとう存じます 今年も鹿児島
島の方が大変お寒かつたやうです
がもうそろそろ春めいてきたことゝ
存じます 台所太平記ももう二三回で
終りになります 単行本が出版され
たらいづれお送り致します

二月二十日

葉書(表) 鹿児島県川辺郡
坊津町役場方
長井正雄様

谷崎潤一郎

静岡県熱海市伊豆山
鳴澤一一三五番地
電話熱海二九七〇番



図版 5



図版 6

③昭和三十八年三月七日

其の後は御無沙汰をいたしてをりますが
お変わりもございませんか 今年も寒い冬でござ
いりましたが漸く春めいて参りまして御地も
暖くなりましたことゝ存じます
先般お願いいたしましたお手傳ひさん この三、四
月に一人でも二人でも結構でございますからお世話
下さるわけには参りますまいか 出来れば二人お願い
いたしたいのでございます 適当な方がございましたら
旅費、その他費用はお送りいたしますからどうぞ
よろしくお願い申し上げます



図版 7

台所太平記も愈々完結いたしました 近いうちに
単行本が出る筈ですから其の節はお送り
申し上げます

三月七日

谷崎潤一郎

長井正雄様



図版 8

封書（表）鹿児島県川辺郡
坊津町役場方
長井正雄様
（速達）
（裏）三月七日

熱海市伊豆山鳴澤
電話熱海二九七〇

谷崎潤一郎



図版 9



図版10

④昭和三十八年三月十六日

拜啓

先般お願い申上げましたお手傳さん
のことでございますがどなたか適当な方
がおりてございませうか こちらは人手不足
で困つてをりますので御都合お聞かせ
願ひ度く御返事御待ち申上げてをります



図版11

三月十六日

谷崎潤一郎

長井正雄様

封書（表）鹿児島県川辺郡
坊津町役場方
長井正雄様

（書留 速達）

（裏）三月十六日

熱海市伊豆山鳴澤
電話熱海二九七〇

谷崎潤一郎



図版12



図版13

⑤昭和三十八年五月二十三日

新緑の候益々御清祥のおんことゝ存じます
女中さんのことにつきましている〜とお世話に
なり 御手紙の同送などお手数を煩はしまして
恐縮に存じてをります
只今拜見した希望者のお手紙の中から二三
の方におたよりして お目にかゝつてみようかと存じ
てをります 今後ともよろしく願ひ申し上げ
ます

右一筆御禮まで

草々

五月二十三日

谷崎潤一郎代

長井正織様



図版14



図版15

封書（表）鹿児島縣川邊郡
坊津町
長井正織様



（裏）五月二十三日

静岡縣熱海市西山町六一四
吉川別荘 谷崎潤一郎代

図版16

書簡は葉書を含め、昭和三十七年十一月から昭和三十八年五月の間にしたためられたもので計五通。前四通は何れも静岡県熱海市伊豆山鳴澤（後の雪後庵）から出され、最後の一通は西山の吉川英治別荘から出されたものである。谷崎が昭和二十八年五月に熱海仲田の前の雪後庵を処分した後に山王ホテル内の土屋別荘をしばらく借りて居住し、翌年四月に熱海市伊豆山鳴澤に転居し、以後昭和三十八年四月に同市の西山にふたたび転居していると記された年譜ⁱⁱの事実関係から、この最後の一通は西山に仮住まいしてから間もないころのものだと判る。

また、谷崎が昭和三十二年十一月に軽微な発作を起こしてから右手に疼痛を覚え、執筆が不自由となり、以来口述筆記となったことから、五通とも代筆によるものと推定できよう。但し、筆跡からすれば、一通目と最後の一通がそれぞれ違う人で二人、あいだの三通が同一筆記者でまた別人の可能性が高く、合計三人の手によるものだろうか。この中に『源氏物語』新訳時の昭和二十八年ころから長年助手を務めていた伊吹和子の代筆も含まれているかもしれない。或いは、谷崎は女中達に筆記を依頼することもあったことから、その中の二三人による代筆の可能性も排除できない。宛名の鹿児島縣川辺郡坊津町役場内の長井正維の名前の「維」が前四通では「雄」、後一通では「織」と誤記されているのは谷崎の直筆でないことと無関係ではないだろう。

谷崎と松子の書簡に共通する名宛人となっている長井正維氏については、当時の新聞記事ⁱⁱⁱに拠れば、郷土の文化と坊津人の血統に誇り高く、「町民が安心して町政を任せ」られ、幾度となく坊津町長に当選した人との記載がある。また、平成八年に坊津に建立した石碑では、

昭和二十二年四月、戦後の荒廃と民生困窮の時に、住民よりの強い要請を受けて教職を辞し、村政の重責を担われた。

以来、実に三十二年の間、首長として辛苦の日々に挑みつつ、ひたすら民生の安定、郷土の復興進展に心血を注ぎ、精魂を傾注された。

常に卓越した理念と行動で進めた政策は、県下に於ても先駆の評価を受け、特に歴史館、水道施設等その余恵を今尚多く受け継いでいる。

いま往時を偲び生涯の遺業をのちに伝えるため、之を建てる。

と、その遺徳を称えている。

書簡は季節の挨拶を除けば、お手伝いさんの紹介を依頼するのが主旨であり、坊津町や泊の人に対する限りない情念が読み取れる。また、お願いしても、なかなかお手伝いさんに来てもらえなかったとみえ、時期や人数ないし旅費等の負担といった具体案を持ち出して懇願する。それでも来てもらえなかったのか、遂に人手不足で困っているといった差し迫った状況にあることを直訴したのが谷崎らしい。最後の一通ではようやく希望者が募ったという朗報が入ったようだが、果たしてどうなったのかはわからない。

谷崎家には昭和十一年から戦後にかけて凡そ十五人もの鹿児島県坊津町泊出身の女中が仕えていた^{iv}が、これらの実在人物をモデルに「初、えつ、梅、みき、まし、節、銀、万里……」などの名でこの最晩年の仮名実録長編『台所太平記』に多くは主役として登場させている。「顔は丸顔で、頬骨が出、口が大きく、頤が張っていい」と、「常に身綺麗で、至って清潔にしている」と、「いつでも雑巾で拭いたばかりのような、サラリとした、真っ白な足の裏を見せていい」たアネゴ格の初にせよ、「正直で誠実なことは初と同じ」で、「随分骨身を惜しまず、まめに働いてくれた娘」だったえつにせよ、「生まれつき利発」で、「小柄で、クリクリと太った、円顔の、色の白い児」で「まるでコケシ人形のような梅にせよ、「大層性急な、早呑み込みをする娘で、半分用を云いつけかけると、皆まで聞かずに駆け出して行く癖があ」ったみきにせよ、「眼だけは圓で、大きくて、愛嬌が溢れ、驚くほど表情に富んでいい」た「眼千両」の銀にせよ、……面目躍如の描写によって、脚色の魅力を感じさせずにはいられない。「うちのお手伝いさんは鹿児島でなければ」とよく人に語った^vところを考え合わせると、谷崎は薩摩娘ひいては鹿児島の坊津町泊という地縁に対し、並々ならぬ情愛を抱いていたことが窺

い知れよう。

種々の資料に拠れば、谷崎は昭和初期の頃から女中を家で働かせるようになってから疎開で引越しを繰り返していた戦時中を含め、戦後にかけてその転居の先々で兵庫、大阪、京都、滋賀、茨城、鹿児島、徳島など全国からお手伝いさんが集まり、文壇の大御所ならではの優雅閑適な中流知識人の生活を送っていた。ところが、昭和三十五年秋頃になると、『週刊新潮』の「掲示板」欄にお手伝いさん募集の広告を出すほどお手伝いさん不足の状況に陥るまでに状況が一変したのである。伊吹和子が証言した^{vi}ように『台所太平記』の執筆は、『夢の浮橋』の発表直後というこの時期とほぼ重なる。谷崎は主人と御寮人を囲んで、かいがいしく立ち働く数多のお手伝いさんを擁した大家族を懐かしむかのように『台所太平記』の執筆に取り掛かったのは想像に難くない。一方、今回発見された女中乞いの五通の書簡は同作が『サンデー毎日』に連載された時期とほぼ同時期に書いたことから、同作のお目見えを好機と見て、お手伝いさん不足の難局を打開しようという意図もあったのではなかろうか。しかし、結果は「お手伝いさんの志願者がめっきり減った。理由は『台所太平記』みたいに書きたてられるのがいやだから」と文豪の所望に反するものであった。このことを察知していたかのように、作品の最後では、

千倉夫婦が最初に阪神間に家を持ちまして、たまたま雇い入れました女中が鹿児島生まれの初であり、引きつづいて、……ずるずると何人も泊から来てくれまして、それぞれに忘れられない印象を残して行きましたので、磊吉はまだ行ったこともない鹿児島の土地に特別の愛着を抱くようになりました。……初や梅の昔を忘れかねて近頃でもときどき鹿児島へ手紙を出して、「お手伝いさん」の斡旋を依頼することがありますけれども、昨今の娘さんたちは……女中奉公などをしようと言う者はいなくなりました。……初は二十年、京都生まれの駒は十三年、銀にしまでも四五年はいましたけれども、もうそんなことは昔の夢です。

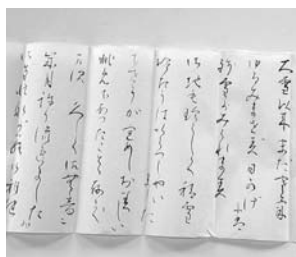
と、磊吉の述懐はいみじくも谷崎自身の心情の吐露であろう。加えて長年高血圧と右手の麻痺に苦しんでいた人生の最晩年に、『台所太平記』に描かれたような賑やかで活気に溢れた生活共同体に戻れなくても、一人や二人でもお手伝いさんが来て助けてくれればと渴望する谷崎の限りない哀愁と寂寥が伝わってくる一節である。

続いて、今回谷崎の書簡と一緒に発見された松子夫人の書簡五通を並列してみたい。前四通は昭和四十三年二月末頃から四月までの短期間に集中して差し出されたもので、谷崎が物故して三年ほどの月日が経っている。最後の一通は唯一別の人に宛てたもので、これらを順次翻刻すると次のようになる（図版17 - 47、51 - 57も合わせて参照されたい）。

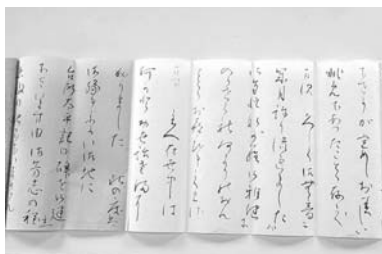
（二）谷崎松子書簡

①昭和四十三年二月二十九日

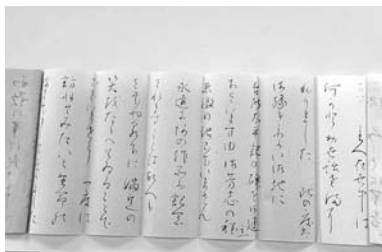
大雪以来まだ寒氣
ゆるみませず日かげには
残雪がみられます
御地も珍らしく積雪
冷たうはいらつしやいました
でせうが定めしお美しい
眺めであつたことゝ存じ
ます 久しく御無音に
歲月許り流れましたが
御多忙ながら御雅健に
いらせられ何よりのおん
ことゝお喜び申し上げます
主人在世中は
何かと御世話さまに
成りました 此の度は
御縁もふかい御地に
台所太平記の碑を御建立
下さいます由御芳志の程
感激の他ございません
永遠にあの作品が記念
されますことは故人も
さぞや泉下に満足の



図版17

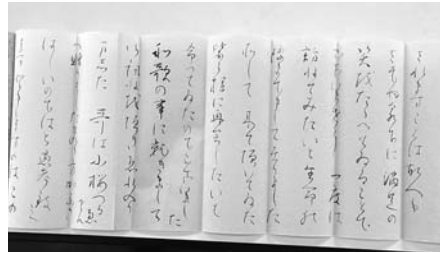


図版18

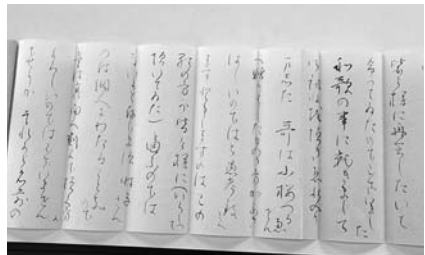


図版19

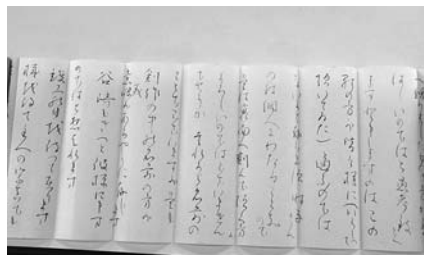
笑をたゝへてゐることで
 ございませう 一度は
 訪ねてみたいと生命の
 際まで申して居りました
 そして来て頂いてみた
 皆々様に再会したいと
 希つてゐたのでございました
 和歌の事に就きまして
 御訊ねを頂き恐れ入り
 ました 哥は小桜つるゑさん
 へ贈りましたものゝ方がふさは
 しいのではと愚考致し
 ますと申しますのはこの
 歌の方が皆々様に（いらしつて
 頂いてゐた）適ふのでは
 ないかと存じます 時子さんの
 のは個人にわたることなので
 是は裏面へ刻んで頂く方が
 よろしいのではございませ
 ンでせうか それから名前の
 ことでございますが是も
 創作の中の名前の方が
 意義があるやうに存じます
 谷崎もきつと彼様に申す
 のではと思はれます
 竣工の日を待つて居ります
 機を得て主人の写真でも
 抱き是非見せに参ります
 倚松庵の夢を御覧頂き
 洵に有難くも嬉しう存じ
 ました 御蔭をもちまして



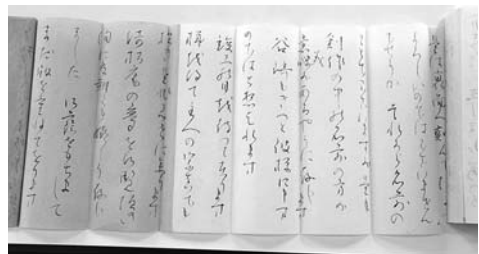
図版20



図版21

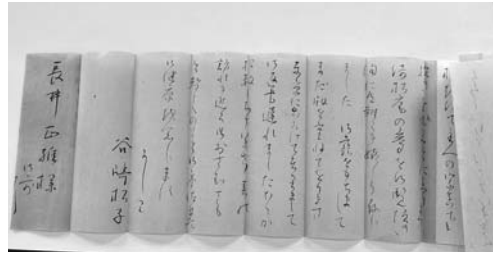


図版22



図版23

まだ版を重ねてをります
 東京に出かけて居りまして
 御返書遅れましたどうか
 お赦し下さいませ 春の
 訪れも近くおさむさも
 今暫らくのことゝ御身御自愛
 御健康を念じます



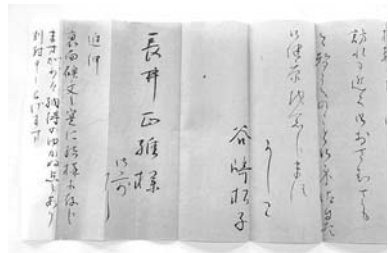
図版24

かしこ
 谷崎松子

長井正維様
 御前
 に

追伸

裏面碑文も寔に結構に存じ
 ますが少々納得のゆかぬ点もあり
 別封申し上げます

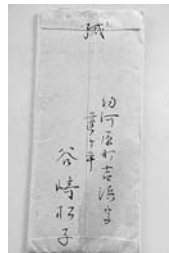


図版25

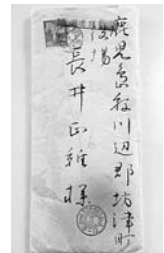
封書（表）鹿児島縣川辺郡坊津町
 役場

長井 正維様

（裏）緘 湯河原町吉浜字
 蓬ヶ平
 谷崎松子



図版26



図版27

②昭和四十三年二月二十九日

先便の追伸にて申し上げました裏面の碑文で
 ございますが私だけで判断もいかゞと中央公論社
 潤一郎全集担当の方々其の他の有識者と御相談申し
 上げましたところこの文章では郷土の女性の
 顕彰碑となり台所太平記の記念碑でなく
 谷崎の方がその引き合ひに出されてあるやうに



図版28

より受け取れないのではと云ふ御意見でそれでは
 意義もなくなり従って初、銀と云ふ二人の女性を
 顕彰することに止まり公の意味を持たぬもので
 極めて個人的な小さな事で終り又世間にも例を
 見ないものではないかと意見一致を見ました
 やはり初、銀はじめ郷土の多くの女性が台所太平記に
 生々と活躍いかにその氣風が愛されたか此の晩年の創作
 によって知られるのでありますと云ふやうに直して
 頂ければと存じます御氣持ちよく理解出来るので
 ございますが自らかうしたものゝ一つのきまりの
 やうなものがあるらうございます
 大変失禮とは存じましたが以上率直に申し
 述べさせて頂きました文章は寔に結構なので
 ございますが混同があると感じられるさうで何分
 此の点よろしくご諒察御氣わるく遊ばさないで
 下さいませ 種々念の為御意見を訊ねて
 をりました為後便となりましたペン字の
 走りがき御宿しの上御判讀願ひ上げます

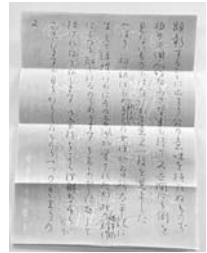
かしこ
 谷崎松子

長井正維尊前

なほ〜申し添へますならば拝見致しました
 裏面の碑文はパンフレット等の説明書には
 およろしいのではと云ふことでございます

封書（表）鹿児島県川辺郡坊津町
 役場
 長井正維様

（裏）絨 湯河原町吉浜
 谷崎松子



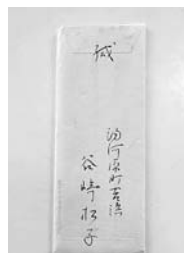
図版29



図版30



図版31



図版32



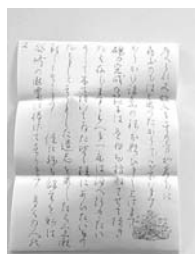
図版33

③昭和四十三年三月二十二日

桜の蕾が灰紅く見え初め間もなく
花の便りも聞けることございませう
御清健にお越しのおんことゝお悦び申し
上げます御多用中を再三御懇書を恐れ
入りました手前勝手なことを申し上げ
痛み入つて居ります私共と致しましては
さゝやかなりとも谷崎の文学碑と稱する
ものでなくとも谷崎あつての御地の女性と
考へられ又故人も其の方が泉下に
喜ぶのではと思つたからでございます
どうか御諒察の程御願ひ申し上げます
碑の完成の節には是非お訪ねさせて頂き
たく存じます主人も一度は泊へ行きたい
そして来て頂いてみた皆々様にあひたいもの
だと申して居りました遺志を果したく念願
致して居ります 僅に残る餘生を私は
谷崎の慰霊に捧げて居ります多くの人の
心に谷崎を蘇らせて頂くことこそ
何よりの鎮魂と考へて居ります
さう云ふ意味からも今回の記念碑は
本当に心からの欣びであり慰めでございます
何分よろしくお願ひ申し上げます
藝術座の台所太平記の初日を脚本を
お書き下さつた松山善三氏と夫人の高峰
秀子さんと見物して参りました
登場の御手傳ひ全部を泊になさいましたが
言葉もそんなでそちらの方言で実に
面白うございましたそのことに就いて
“東宝”と云ふ雑誌に頼まれて楽屋話と
題して原稿を書きました來月号發刊



図版34



図版35



図版36



図版37

次第お送り申し上げます

文案は(一)(二)どちらでも結構でございますが
(二)の方が纏りがよいのではございませんでしょうか
感冒で臥床御返事遅くなりました
まだはつきり致しませず大変乱筆にて
失禮申し上げます
氣候のvari目特に御自愛下さいませ



図版38

かしこ
谷崎松子

長井正維様

御前に

封書(表) 鹿児島県川辺郡坊津町

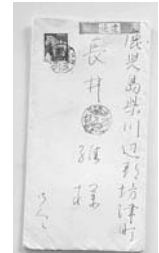
長井正維様

御人々

(裏) 三月廿二日



図版39



図版40

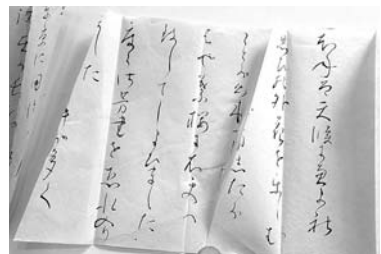
湯河原町吉浜
字蓬ヶ平
谷崎松子

④昭和四十三年四月十二日

本年は天候に恵まれ
思ひの外花を楽しむ
ことが出来ました
はや葉桜に衣更へ
致してしまひました
度々御芳書を恐れ入
りました

東京に用件が多く

滞在が長引き御返書が
遅れ申し訳ございません



図版41

つるゑさんへの色紙が
 見つからぬと云ふこと
 ならば矢張時子さんへの
 歌を表面に彫って頂く
 より他ございません
 つるゑさんへの歌の方が
 特定されないでよい
 のではと存じましたが
 私にと仰せいただき
 御心情はまことに〜
 嬉しうは存じますが
 主人の文字がございます
 限り何と申しても立派で
 あり意義もございませ
 どうか左様にお願ひ申し
 上げます

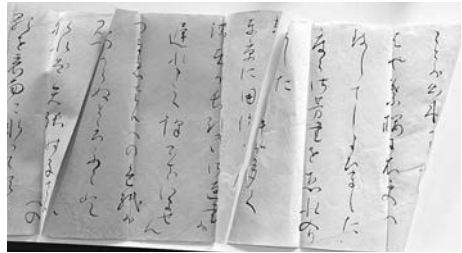
碑のデザイン拝見致し
 ましたが大変お見事
 なものでございますね
 完成を待つて居ります
 御多祥念じます

かしこ
 谷崎松子

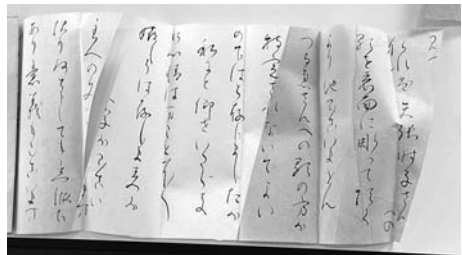
長井正維様
 尊前

封書（表）鹿兒島縣川辺郡坊津町
 長井正維様
 （裏）緘四月十二日
 神奈川県湯河原町
 吉浜

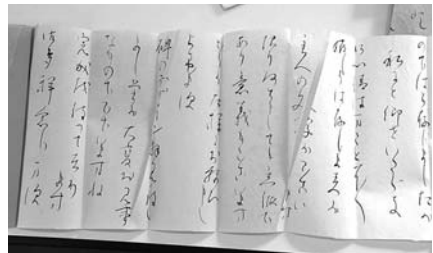
谷崎松子



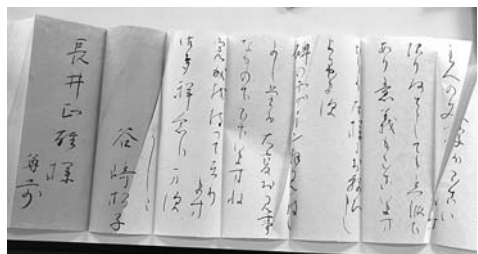
図版42



図版43



図版44



図版45



図版46



図版47

何れも夫の谷崎が「泉下の人」となった時期の書簡である。四通はともに『台所太平記』記念碑の建立と碑文にまつわる相談の内容であり、文中に触れてある「小桜つるゑさん」は前出の『台所太平記』中の「初」のモデルで、一方の「時子さん」は本名が岩田時子と言い、作中では「銀」の名前で登場していることは周知のとおりである。また前述したように、「初」と「銀」はそれぞれ『台所太平記』前後編の主人公と見なされるにふさわしく、共に谷崎の描写では感情移入の多い脚色で、言わば薩摩娘の代表格である。実際においても、二人には谷崎から幾度と歌が贈られ、そのまま作中でも再録しているのである。



図版48

松子夫人の書簡において、たびたび相談を持ちかけられた『台所太平記』記念碑は、現在坊津の南さつま海道に立っている^{vi)}。(図版48参照)
石碑の表には、「銀」が嫁いでいく際に詠まれた

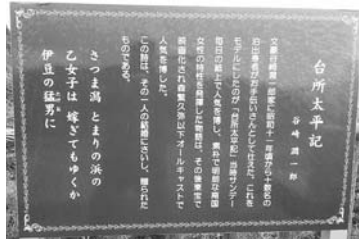
さつま潟 とまりの浜の 乙女子は 嫁ぎてもゆくか 伊豆の猛男に

の一首^{ix)}が刻まれており、その横の案内板(図版49参照)には、

文豪谷崎潤一郎家に昭和十一年頃から十数名の泊出身者がお手伝いさんとして仕えた。これをモデルにしたのが「台所太平記」当時サンデー毎日の紙上で人気を博し、素朴で明朗な南国女性の特性を發揮した物語は、その後東宝で映画化され

森繁久弥以下オールキャストで人気を博した。
この詩は、その一人の結婚にさいし、贈ら
れたものである。

と記してある。また、記念碑の裏面（図版50
参照）には、



図版49

文豪谷崎潤一郎家には昭和十一年頃から初、
銀はじめ十数人の郷土出身の女性がお手伝
いさんとして仕え文豪の晩作「台所太平
記」にこれらの女性が登場し素朴、明朗で
生々と活躍しています
碑文はその一女性におくられたもので、こ
のほかにも

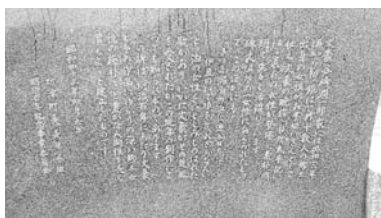
「さつま潟泊の浜に漁る日も
伊豆のいでゆを忘れざらん」

と、泊の女性をいとしみしのばれた歌があ
り、いかに文豪がその気風を愛されたかこの晩年の創作によっても知られるのであ
ります

この碑は、明治百年にあたり文豪とその作品にゆかりの深い郷土女性の純朴さと豊
かな人間性を長く讃えようと建立したものです

昭和四十三年四月六日

坊津町長長井正維
明治百年記念事業委員会



図版50

となっている。

当時の町報の記載*に拠れば、記念碑の建立は明治百年の記念行事の一環であり、除幕式は、昭和四十三年五月十日の午後四時に泊九玉神社境内で、町長の長井さんをはじめ、嘗てお手伝いさんだった数人も参列したうえで「文豪と郷土女性の美しいゆかりの碑が完成した」。また、「台所太平記」の碑は「みんなから愛される豊かな人間性をはぐくんでもらうよう、郷土に愛情と誇りを持つ気風を養い、「豊かな人間性を讃え、後世に残すのがねらい」とされている。

一方、記念碑の建立と碑文を考案した際に、町長の長井さんから幾度と相談が

持ちかけられ、少々紆余曲折があったものの、最終的には創作中の名前を使い、時子さん（銀）への歌が表面、つる糸さん（初）への歌が裏面、それも特定しない形にし、さらに「郷土の女性の顕彰碑」というよりも郷土の女性の愛された気風が谷崎の「この晩年の創作によって知られる」ものだという書簡から読み取れる双方の合意がほぼ忠実に石碑に反映された形となったと言える。

ただ、当初の松子夫人が望んでいた「つる糸さんへの歌が表に」という結果にならなかったのは、単純に歌の色紙が紛失され、谷崎の筆跡がとれなかったのが理由であろう。また、石碑の日付になっている「四月六日」と実際の除幕式の期日とかなり隔たりがあるに至っては、予算のことなどに起因するものだろうか。松子夫人に書簡で相談する最中に碑文が既に決まっていたことは考えにくいので、少なくとも松子夫人の役場宛ての最後の書簡（日付が四月十二日）以降の出来事と考えたほうがより自然であろう。

いずれにしても、今回発見された谷崎の書簡五点と松子夫人の書簡四点がそれぞれ、『台所太平記』という作品の創作意図や完結前後の経緯、文豪最晩年の創作ないし生活様相を知る上では重要な資料となっており、一方松子夫人のものは文豪の死後も永遠に後世に残るような地縁や人縁を題材にした文学記念碑の建立を巡って、文豪夫人としての鎮魂の思いや周りの人々が傾注した心血をうかがい知ることができる貴重な資料となったと言えよう。

最後に、今回発見された一通のみ別人宛のもので、松子夫人から『台所太平記』の主人公である銀（時子さん）のお母さんである岩田しげさんへの書簡も併記する。

⑤昭和三十一年十一月廿五日

晩秋の朝夕肌さむさを覚える様になりました おたづねも申上ず其の後は御無沙汰に過ぎて居りますが
お揃ひ皆様には御機嫌にいらつしやいますか 御祖母様も御恢復にて何よりおめでたかどうかこの上とも御養生長寿をお祈り申して居ります
さてこの程はときさん突然盲腸で



図版51

大変御心配をおかけしてすみませんでした
 もつと早く詳細経過をお報せ申上げる
 可きが訪客多く忙しい日が続き
 思はぬ失礼を申し上げましたが盲腸と申し
 まして大層軽く手術も実に簡単に
 すみ入院と申しまして四五日ですむ
 程度であとも至極元気で昨日も
 こちらへ福井の奥さんと来られました
 外科のお医者さんも一番上手な方を
 選びました福井様も親身に御親切に
 よく御世話下さいました勿論こちらからも
 ときさんの朋輩を一人つけました
 お离れになつてみて病氣とかきくのは奈何に
 案じられますことよく〜御推察出来ます
 眼のあたり元気な顔を御らんにならぬと
 御安心もゆき難いとは存じますが
 福井様も本月から来月にかけて実
 にお忙がしく今帰國の為に御迷惑をかけるのは
 私共から考へまして不義理に存じます
 手術の経過でも悪くて働けぬ場合は
 そんなことも云つてられません
 顔いろはよし何の心配なくみうけられます
 ときさんも自分でも大丈夫と申します
 種々相談の上今回は帰國は見合せ
 四五日中にこちらへ泊りがけで躰をやすめ
 によこして頂くやう福井さんにも願ひ
 致しておきました 健康のことはこちらで
 始終注意して居ります故何卒御放心
 ねがひます おさむさに向ひ皆様くれ〜も
 お身御大切に遊ばしませ

かしこ
 松子



図版52



図版53



図版54



図版55

岩田志げ様

御前に

封書

(表) 鹿児島縣川辺郡

坊津村字泊

岩田志げ様

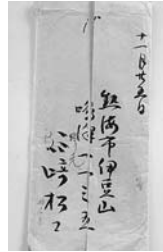
御許に

(裏) 十一月廿五日

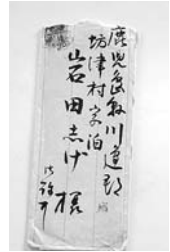
熱海市伊豆山

鳴澤一一三五

谷崎松子



図版56



図版57

前述の四通の書簡よりも早い時期の昭和三十年代のものだが、明確に何年のものなのかは書簡からも消印からも今回判別するには至らなかった。ただ、差出人の住所から昭和三十八年四月に西山に転居するまでの時期であり、谷崎の前四通の書簡が出された場所と同一場所だと判る。手紙には、かつて谷崎家でお手伝いさんとして働いていた「ときさん」こと岩田時子はこの時福井家に仕えていたこと、そして盲腸で手術を受けたこと、経過や回復が良好であること、故に帰郷を見送らせたいこと、そしてその親族への気遣いなどが綴られている。これは「台所太平記」とは直接関係しないものの（「ときさん」は作中人物のモデルではあるが）相互補完の価値があり、他の書簡と共に一次資料として谷崎文学の全貌を把握するのに資することを願いたい。

注

¹ 家族の使用人について、谷崎が『台所太平記』の冒頭で時代ごとに呼び方が変化する中、「この話の中に出て参ります女中たちも、『さん』をつけて呼ばなければ現代の女中さん方に叱られるかも知れませんが、しかしこの話は戦争以前、昭和十一年頃から始まる物語なので、やはり『女中』と云う呼称を用いませぬことには、どうにも情が移りません。従ってこの物語ではすべて呼びつけになっておりますが、その点は前以て御諒承を願っておきます。」と述べている。これを踏まえ、本稿で用いた「女中」の言葉もそうした時代的、職業的意味合

いに基づいたものとする。

- ii 『谷崎潤一郎全集・第二十六巻』「年譜」(中央公論社1990年3月発行)に拠る。
- iii 昭和31年3月8日付毎日新聞記事「ふるさと自賛・花咲いた『文化』」や昭和38年4月27日付毎日新聞記事「5選挙目の顔・“ファイト”満々」に拠る。
- iv 昭和40年10月10日付毎日新聞記事「薩摩路の名作2」に拠る。
- v 昭和40年10月10日付毎日新聞記事「薩摩路の名作2」に拠る。
- vi 伊吹和子著『われよりほかに』(講談社、1994年2月)
- vii 昭和40年10月10日付毎日新聞記事「薩摩路の名作2」に拠る。
- viii 九玉神社にあった本碑(図版48参照)は2014年に5月に現在の南さつま海道丸木崎展望所に移動している。
- ix 前出の昭和40年10月10日付毎日新聞記事「薩摩路の名作2」に拠れば、この歌は岩田時子さんに贈られた色紙に書かれ、最後に「祝時子結納 潤一郎」とあるという。
- x 坊津町報(昭和43年5月25日発行)

附記

本稿は2016年8月に鹿児島で行った文学探訪の際に入手した資料によって整理し、加筆したものである。尚、本稿関連の調査、執筆に当たっては、坊津町在住の鮫島昭一さん、名古屋大学国際開発研究科の櫻井龍彦先生、愛知東邦大学人間学部の増田孝先生より多大なご支援とご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

